沖縄の伝統楽器三線に関する人々の意識

工藤　将輝

１．はじめに

沖縄は歌の島と呼ばれる。三線という伝統的な楽器を伴い、誕生日や結婚式、お墓参り、エイサーなどの様々な場面で歌が歌われている。この世に生を授かった時からその人生をまっとうする時まで、沖縄人は歌三線と共に生きている。歌と三線は切り離すことの出来ないものであるようだ。

私はこのように沖縄の人々の人生に密接に関わっている三線に魅力を感じ、それがいつ頃、どのように沖縄に定着していき伝統的な楽器となったかに興味を持ち、今回のフィールドワークのテーマとした。

本稿では三線の主な特徴を述べ、次に歴史を先行研究により述べていく。そして、沖縄の伝統的な楽器である三線に携わる職業に就いている人々に注目し、彼らはどのような意識を持ち、三線を扱っているのかを考察していきたい。

２．三線の構成

三線（サンシン）は主に弦（チル）、胴（チーガ）、棹（ソー）で構成されている（写真１）。そして、胴と棹には本土の三味線とは異なる大きな特徴がある。その二つの特徴を述べていきたい。

写真1　三線

２.１　胴（チーガ）の特徴

三線は蛇皮を胴に張っているのが大きな特徴である（写真２）。そのため、「蛇皮線」

と本土では呼ばれることもあるが、沖縄ではほとんど呼ばれていない。沖縄で蛇といったらハブと連想するため、ハブの皮を張っていると思われがちだが、ハブの皮ではなくニシキヘビの皮を張っている。

ニシキヘビは沖縄には生息していないため、材料となる蛇皮は輸入されている。昔から三線にはインドニシキヘビの皮が用いられ、タイが主な原産国であった。しかし、インドニシキヘビは絶滅の危機からワシントン条約により国際取引が全面に禁止された。そのため、現在ではインドニシキヘビの亜種であるビルマニシキヘビが輸入されている。ビルマニシキヘビは分布が広く、東南アジア全域に生息している。ワシントン条約において、原産国の輸出許可があれば輸入できる唯一のニシキヘビである。

写真2　胴が装飾された三線

現在、蛇皮の輸出を許可しているのはベトナムだけである。野生のニシキヘビを捕まえることが少なくなってきており、最近は沖縄への輸出用の養殖が盛んになっている。ビルマニシキヘビの大きなものでは体長５メートルを超えるものもあり、１匹から７～８枚の三線用の皮を取ることができる。若い蛇は皮の中央が厚く、両端が薄くなっているのに対し、老いた蛇はどこも同じ厚さで、均等性があるため、若い蛇より老いた蛇の皮ほうが良質とされる。若い蛇の鱗はひし形であるが、老いた蛇の鱗は丸や楕円形であるため、鱗の形でこれらを区別することができる。

現在では破れにくいナイロン製の人工の皮や外見を重視して装飾された人工の皮（写真２）が用いられることも多くなってきている。

２.２　棹（ソー）の特徴

三線は棹が最も重要視されている。三線の価値は棹でほとんど決まる。棹の長さは平均 80 センチ前後であり、どの三線においても長さはほとんど差がない。ところが、材料となる木が数種類あるため、重さには差がある。材料となる木には、黒檀（黒木、クルチ）、紫檀、イマヌキ、イスノキ、オオハマバオウなどがある。黒檀で作られた棹は重く、イスノキで作られた棹は軽い。

この中で最も価値があるとされているのは黒檀である。特に八重山産のものは最高級のものとされている。変形しないこと、硬いので音面の磨耗が少ないこと、そして音が良いため価値があるとされる。琉球王朝時代から現在に至るまでの間に八重山産

の黒檀は取り尽くされたため、現在伐採禁止となっている。

現在、黒檀は西表島や石垣島の一部に残っているが、三線の棹を作れるような太い木は既にないといわれている。黒檀伐採が禁止されてしばらくの間は三線店に多少の備蓄があったが、今はすでに底をついてしまった。そこで目をつけられたのが海外のクルチである。当初、アフリカ産の黒い木が輸入されたが、沖縄の黒檀とは質が違うと嫌われ普及しなかった。そこで、黒檀を探したところフィリピンに大量に繁茂していることがわかった。このフィリピン産黒檀で作られた三線は沖縄産黒檀で作ったものと見分けが出来ないほどの物であったため評判が良かった。しかし、八重山産黒檀が強い人気を持っていたため、フィリピン産の黒檀を八重山に輸入し、そして八重山産として売るという問題が発生している。

棹にはもう一つ特徴がある。本土では芸能者が多く漂泊していたため、三味線の棹を三本に折れるようにし、容易に持ち運べるようにしていた。しかし、沖縄には三線を持ち運ぶ習慣がなかったため、また、棹に価値を見出していたため三線の棹は折られることはなかった。

３．床の間の三線

昔の沖縄において、高価な蛇皮張りの三線があることは裕福であり、また、歌舞芸能に理解のある印であった。三線は単なる楽器ではなくステータスシンボルの役割を果たしていたのである。たとえ弾けなくとも持っていることに意味があったのだ。

沖縄の伝統的な家屋（写真３）は石垣の屋敷囲いに囲まれており、入り口は門扉がない。そこにはヒンプンという目隠し塀（写真４）があるだけであった。また、外壁の割合が比較的少なく、雨戸の割合が比較的多い。その上、風通しを良くするため、雨戸を閉めることが少なかった。仏壇や床の間など入り口に面したところは外に開放されていたのである。また、一番座である床の間は客を迎えるために主に使用された。昔の沖縄の人は他人の目によくつく床の間に三線を飾ることで自らのステータスを示していた（写真５）。

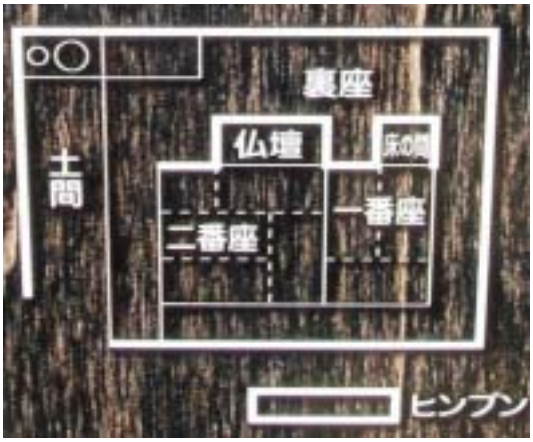

写真3　沖縄の伝統的な家屋の間取り

写真4　ヒンプン

写真5　床の間の三線

４．三線の歴史

三線の歴史を先行研究から述べていく。そして、最後に私が感じた三線の隆盛のイメージ（図１）を載せる。

４.１　伝来

山内盛彬（1959）によれば、琉球王国が正式に中国に朝貢し貿易が始まったのは1372 年であったため、それ以後、14 世紀には中国から三線の原型となる三弦が伝来したということである。しかし、沖縄各地の按司、豪族が琉球王国としての正式な中国との貿易が始まる前に自主的に中国との貿易をしていたため、これ以前に三線が沖縄に伝来していた可能性があり、いつ伝来したかという年代は正確にはわかっておらず、諸説が様々ある。

三弦の起源は、三千年程も前のエジプトに遡る。エジプトで作られた弦楽器は三線やバイオリンなどの元になったものである。西に渡ると弓で弾くバイオリンなどに改良され、東に渡ると撥で弾く三弦や三線に改良されていった。

琉球王国に三弦が伝えられた時、ただ単に楽器本体が伝えられたのではなく、三弦の演奏者もそのまま琉球王国に渡ってきた。沖縄に三線を伝えたのは中国から沖縄に移住してきた人､それも主に久米三十六姓と呼ばれる人たちである｡久米三十六姓は、明の洪武二十五年（1392 年)、明の太祖の命により、琉球人の航海を援助するために琉球王国へ派遣された操船に巧みをなす中国人たちであった。彼らは主に対外関係にあたり、航海貿易で船長、船頭などの任務についた。その後、三十六姓の中からは、琉球王国の重要な役職に就くものも現れた。彼らはまた、優秀な中国の文芸、学術、建築などを伝え、歴史上大きな役割を果たした。

一般的には三十六姓が望郷の気持ちを表すために、沖縄に三弦を携帯してきたものと考えられる。

中国という当時の先進国からの伝来・移住者であったため、三弦は貴重なものとして扱われ、渡ってきた演奏者は貴重な人材として重宝された。琉球王国の人々にとっ

て三弦はただの楽器であるだけではなく、中国の先進文化そのものであったため、渡来したそのままの蛇皮にこだわり、楽器の大きさや形状に大きな変更を施そうとはしなかった。その後、琉球の風土に合うように改良され、規格も音色も沖縄様式になっていった。

４.２　宮廷への普及

十五世紀に三線が琉球に渡ったとされ、そのとき一緒に渡ってきた久米人三十六姓などの中国人が宮廷の貴族たちに普及させていった。

十五世紀に、琉球音楽は、かつて主流であった神事祭祀音楽から、宮廷儀礼音楽へと、その主流が変わる歴史的な転換をした。祝女信仰は、伝説時代から始まって、古琉球までにはすでに広く行われていた。古琉球の社会では、祝女は神職を掌り、人々はそれをノロと称していた。ノロの神職はしばしば音楽・舞踊とともに結合し、そして、その音楽・舞踊が神事芸能になっていった。その中で最も典型的なものがオモロである。祝女を中心とした神事祭祀音楽は、十五世紀には隆盛期となり王室から村落および遥かに遠い離島まで広がっていった。ところが、十五世紀後半に琉球王朝にオモロ主取の役職が設立され､以前からノロだけが歌っていたオモロの状況を打ち破り、男子がオモロを担当するようになった。そして、このオモロが発展し、宮廷儀礼音楽になっていった。これまでは、ノロが歌う祝女信仰のシンボルであったオモロは、男子が歌う宮廷儀礼のシンボルとして変化していった。

中国から伝来した三線は、音域、音色および楽器の性能などの面から男性的特長を持っていた。そのため、男が歌い、宮廷儀礼のシンボルであったオモロという重要な芸能と結びつき、次第に王宮の貴族の間に普及していった。また、これにより三線は男性が弾くものという認識が生まれ、以後長い間続いていった。

４.３　宮廷での発展

宮廷の三線音楽は王宮の庇護を受けながら、中国からの冊封使を迎えるための御冠船芸能や江戸上りの際の上演演目と結びつき発展を遂げていった。さらに、王宮には三線主取という三線製作のための役職が置かれた。そのため製作技術が向上し、名器と呼ばれるものも生まれるようになった。

しかし、王宮において三線を弾くことが出来る人は家系により決められていた。また、三線の楽譜や指南書などが出来上がっていなかったため、耳や指で音や弾き方を覚えなくてはいけなく、しかも一子相伝のような形で伝えられていたため、誰でも弾くことが出来るものではなかった。

この頃には貴族たち以外にも、豪農、豪商などの財力のある者たちも三線を持つようになった。三線は材料が外国からの輸入品であったため、製作技術を持っていたのは宮廷の役人であったため、非常に高価なものであり、みなの憧れであった。そのため、三線を弾けずとも持つことは彼らのステータスとなっていた。

４.４　民間への伝来

三線の民間への伝承としては赤犬子（アカインコ）という人物が広めたとされている。「哥（ウタ）と三線（サンシン）の　むかしはじまりや　犬子（インコ）音東（ネアガリ）の　神の御作」（歌と三線の昔はじまりは赤犬子と音東の神のわざである。）という沖縄のオモロの名手で歌三線の創設者とされる赤犬子を称える歌がある。音東（ネアガリ）とは、オモロ（琉歌以前の古い形式の沖縄の唄）の音取り、音頭取りの意味を持つ。

この人物は読谷に現れ、そこから沖縄中に歌三線を伝えながら流浪し、その後、王朝に迎えられて官職に就いたとされる。

また、民間への伝来の説として、王府の貴族と民衆の結びつきによるものがある。王府で行われる芸能は庶民には門外不出のものであったが、士族の屋敷にはその地行知の村から大勢の村人たちが奉公に出入りしていたため、そのような人たちが屋敷の中で行われる諸芸を憶え、村に持ち帰り庶民の間に伝えた。彼らは、そこで使われていた三線を手に入る素材を使ってみようみまねで作るようになり、少しずつ民衆の中に広まっていった。そして、三線は民衆の中で生まれた民謡と結びつき、庶民の三線音楽が次第に形作られていった。

４.５　琉球処分による宮廷芸能と民間芸能の融合

1879 年、琉球処分による廃藩置県で琉球王国は崩壊し、沖縄県となった。明治政府の命により、中国との冊封・朝貢関係も禁止され、皇民化教育により沖縄の文化は後進的なものとして一切否定された。中央志向が強まり、本土の方が上とみなされるようになった。

琉球処分により、琉球王国は崩壊しため、宮廷芸能としての三線の担い手たちはそれまでの王宮の庇護を失い、失業の憂き目にあうことになった。王宮での地位を失った旧貴族たちは王府時代に知行地から奉公に来ていた村人を頼り没落していった。これらの旧貴族たちは庶民の家、料理やなどに出向き、宮廷で行われていた諸芸を披露し生計を立てていった。その結果、貴族たちが嗜んでいた諸芸が庶民の側に流れていくこととなり、庶民の芸能と宮廷芸能が融合し始めた。それに伴い、王宮のものであった三線が庶民の間に普及していった。

また、庶民の間に三線が普及していったことにより、沖縄民謡が発展していった。また、八重山などの離島にまで三線が普及し、八重山民謡などの離島の民謡が三線と結びつき、島の民謡も発展していった。

４.６　民間への普及

18 世紀ごろに三線の楽譜である工工四（クンクンシー）が初めて作られた。それ以後様々な曲の工工四が作られ、それまでは曲を耳や指で覚えなくてはいけなく大変であったものが、容易に曲を覚えることが出来るようになった。そのため、三線音楽は

大きく普及していった。

また、農村の若い男女にも三線は浸透していった。若者たちは夜になると村の辻、浜辺、野原などに集まり一晩中三線を弾き、それに合わせて歌い、踊った。これを毛遊び（モーアシビ）といい、恋が始まるきっかけとなったものであった。この時期、三線は未だに高価なものであったため農村では手に入れることの出来る材料で作ったものが使われていた。

沖縄が薩摩藩に侵略された後、薩摩藩が毛遊びを怠惰な風習であり、労働意欲を低下させるものとして禁止令を出したため、毛遊びを表立って行うことができなくなった。しかし、役人の見えないところで行われ続け、農村における三線の普及に貢献した。

さらに、庶民に三線を普及させていくのに貢献したのが辻遊郭（チージ）で働く「じゅり」と呼ばれる女性たちであった。じゅりは琉球王国時代には中国からの用心や、薩摩の役人たちの売春相手として利用された。廃藩置県で琉球藩から沖縄県になったことにより、辻遊郭は明治政府が売買春を認める公娼として位置づけられた。それによりあらゆる取締り規則が出され、じゅりたちには営業許可の鑑札が交付された。それにより辻遊郭は沖縄最大の社交場となり、財政官界、教育界、農漁業に至るあらゆる業種、身分の男性たちに利用されるようになった。

女性たちは良いじゅりになるため、三線や踊り、礼儀作法、料理などの教養を身につけた。男性たちは自らの教養が高いことを示し、彼女たちの気を引くため三線を所有し、その技術を磨く人々が増えていった。彼らは三線の練習に熱中するあまり、仕事をおろそかにすることが多々あった。そのため、アシバーと呼ばれ三線を弾くことに対する悪いイメージが広まった。

大正期には琉球研究が人気となり、民俗学者の柳田国男、折口信夫が沖縄を訪れ学術的な考察をし、その成果により沖縄の文化、芸能、三線音楽の重要さが示されることとなった。その後、沖縄の文化の公演が本土で行われた。これにより、本土の知識人たちが沖縄の文化、芸能、三線音楽に対する関心と認識を深めることとなった。

４.７　沖縄戦による喪失

1945 年、第二次世界大戦により沖縄は日本で唯一の戦場となった。鉄の雨が降り注ぎ、焼け野原になってしまった。戦火の中で家を失い、家族までも失った。三線もその多くが失われた。

戦前には子どもの玩具としてもあったというカンカラー三線を物資の調達が極めて困難な中で、米軍の折りたたみ式寝台の骨を棹に、缶詰のカラを胴にし、落下傘の紐を弦に仕立てて作られた。この三線は戦争で傷ついた民衆の心を慰め、生きる支えとなった。

４.８　戦後の復活

沖縄は米軍の直接統治として軍政が敷かれ、焦土となった故郷にさえ米軍の占拠による立ち入り禁止令で帰ることもままならない状況が続いた。住民支配には芸能が有効であると認識していた米軍は、十分な食料を与える代わりに人々の芸能活動を後押しした。

また、沖縄の人々は敗戦を機に、これまでの沖縄の伝統文化を軽視する思想が振り払われるようになり、自らが生まれ育った島を見つめなおし、その伝統文化を深く考えるようになった。この思想の転換により、沖縄の伝統文化を復活させようとする動きが起こり、そのための芸能団体が設立されていった。

米軍の後押しやこの動きなどにより、歌、踊りと共に三線は次第に沖縄全体に復活していった。

４．９　三線ブーム

戦後、沖縄の経済が成長し、生活が豊かになるにつれて三線を所有できる沖縄の人々が増えていった。

1960 年代には喜納昌吉の「ハイサイおじさん」、1980 年代にはりんけんバンドの「ありがとう」、1990 年代には THE BOOM の「島唄」などの沖縄ソングの本土でのヒット、近年の沖縄ブームにより沖縄音楽、三線が本土の庶民層にも広く認知されるようになった。これにより県外での三線の需要が発生し、三線を所有する人が増加した。

これにより、以前あった悪いイメージが次第に影を潜め、三線は沖縄の伝統文化としての地位を確立していった。

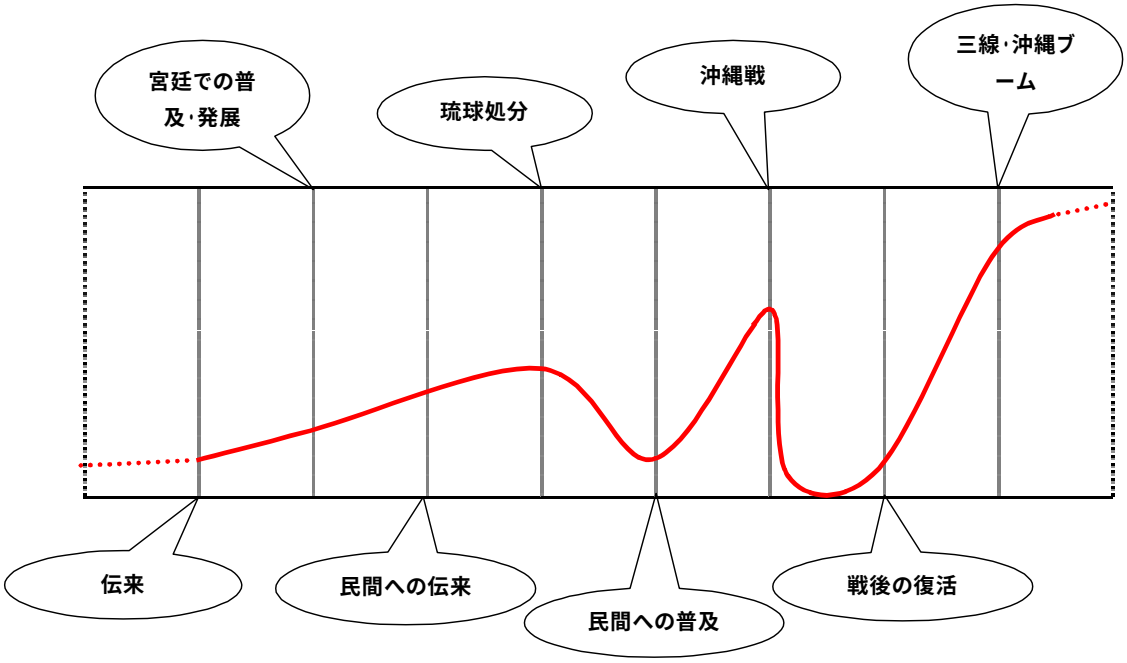

図1　三線の沖縄における隆盛のイメージ図

５．三線に関する人々の意識：フィールドワークによる考察

５.１　調査の概要

（１）調査目的

三線に携わる職業に就いている人に注目して、それぞれの人が三線に対してどのような意識を持っているのかを調査し、彼らの三線に対する意識を考察する。

（２）調査対象

三線店を経営する 30 代の男性２名（Ａさん、Ｂさん)、三線教室を開いている 40 代の男性１名（Ｃさん)、売店で三線などのお土産を売っている 60 代の女性１名（Ｄさん)、琉球村で働いている 70 代の女性１名（Ｅさん）の５名に聞き取り調査を行った。

（３）調査内容

・いつから三線を弾き始めたのか、また誰から習ったのか。
・三線は学校で習ったか。
・三線は高級品という意識はあるのか。また、普段どう扱っている。
・三線を弾くことに対しての意識はどんなものか。
・沖縄県外で生活し、外から三線を見たことがあるか。
・本土の人に三線を紹介する際に意識していることはあるのか。

これらの項目を中心に調査を行った。

５.２　調査結果

インタビューした人ごとにその内容を記述していく。

Ａさん：

祖父や父が三線を弾くことが出来たので、子どもの頃から家で習っていた。自分は学校では習ったことはないが、子どもには学校で三線の授業があった。学校で三線の授業が行われるようになったのは最近のことである。おそらく、アシバーなどの悪いイメージがなくなってきたからではないか。三線で扱われる歌はウチナーグチが使われているので子どもたちに対して方言を教えることを目的で行われている。昔は方言を使うなと学校で教えられてきたのに今になって方言を奨励するのは変な感じがする。

子どもの頃から三線を高級品と意識したことはない。身近にある親しみのある楽器である。

三線を弾くことに対して悪いイメージはなかった。また、弾けることがステータスと思ったこともない。

数年前まで県外で仕事をしていたため、外から三線を見たことはある。その頃、三線を弾くことは無かったが、三線の音を聞くと沖縄を思い出していた。そして、三線

の素晴らしさを再発見し、仕事をやめて三線職人になろうと決意し沖縄に戻ってきた。
三線に興味を持ってやってくるのでうれしい。沖縄に来なくても三線が買えるようにネットでも販売を始めた。直接店にやって来てくれる方には三線体験が出来るようにしている。この体験で弾いてもらうのはみんながよく知っている「島唄」だ。

Bさん：
父が三線のお店を経営していたので小さい頃から馴染みがあり、父に習い、弾くことが出来た。兄弟もみな弾ける。
学校では習ったことがない。自分と同じ年代（三十～四十代）で、周りに三線を教えてくれる人がいない人は独学や教室で習い、弾けるようになる人も多い。しかし、最近、教育課程に和楽器に触れるということが盛り込まれ、学校でも三線を授業で扱う学校が増えてきた。
三線は高級品と感じたことはなく、馴染みのあるものである。沖縄では床の間に三線を飾る人がいるが、中には押入れの中に入れて埃がかぶったままにしている人もるので、もっと大切にして欲しい。
今は三線を弾くことに悪いイメージはないが、三十年ほど前は不良、やくざを意味するアシバーと呼ばれイメージが悪かった。最近では本土でも三線が受け入れられ、三線ブームの中にいる。
大学時代は本土にいたため外から三線をみたことがある。やはり、三線の音を聞くと故郷を思い出す。
本土に出て行った人が三線を購入してくれたり、本土には三線店があまりないので、沖縄に戻ってきたときには三線についての相談に来てくれる人もいる。また、外国から来た友達を連れて来てくれることもある。外国の方は沖縄の音楽をほとんど知らないので CM でよく流れている曲で三線を紹介することもある。本土の人に紹介するときは主に「島唄」を弾いて紹介する。本土の人は沖縄の人がみんな三線を弾けると思っている人が多いが、弾けない人もたくさんいる。

Cさん：
三線を始めたのは三十代になってから。つい最近である。三線教室に通って習った。
学校では習ったことがない。親戚には三線を弾くことが出来る人がいたが、それほど弾きたいと思ったことはない。
三線を高級品と思ったことはないが、商売道具だから大切に扱っている。
三線を弾くことに悪いイメージはなかった。
数年前まで本土で仕事をしていたので外から三線を見たことがある。偶然テレビで三線の演奏を見て、沖縄に帰ったら三線を始めようと決意した。自分は長男なので墓を守るため、いずれ実家に帰らなくてはならなかった。
以前は三線教室には修学旅行生が多くやってきたが、最近は減ってきた。今は観光

客がほとんどだ。三線を教える際に用いる曲は「島唄」だ。この曲によって三線が有名になったし、本土の人は沖縄にある昔からの曲は知らないが、この曲はみんな知っているから。

Ｄさん：
　三味線は夫が他界したため、その寂しさを紛らわすために知り合いに習った。
　三味線では習ったことはない。
　今は誰でも買えるが、昔は高級品であった。カンカラの三味線があるけどあれは音が悪くて今は弾く人はいない。
　三味線は女が弾くものではないと小さい時から教えられてきた。子どもの頃は三味線を触ると父親に怒られた。男の人しか弾いてはいけないというイメージが強い。最近になって女の人も堂々と弾けるようになった。
　ずっと沖縄に住んでいるので外から見たことはない。
　昔のゆっくりとした時間の中にある沖縄を感じて欲しい。人前で三味線を弾くのは恥ずかしいので弾くことはほとんどないが、お客さんには三味線を実際に触ってもらい、楽しんでもらっている。

Ｅさん：
　本土の人はお年寄りがみんな三味線を弾けると思っている。そのため、弾けないのは恥ずかしいなと思い最近習い始めた。周りの友達もみんな最近習うようになった。
　学校では習ったことはない。
　昔、三味線は高級品であった。今は安く買える。
　昔は三味線を女が弾くものではなかった。男の人は隠れて練習していた人もいた。みんなの前で三味線が弾かれるのは決まった行事のときがほとんどだった。
　ずっと沖縄に住んでいるので外から見たことはない。
　特に意識していることはない。本土から来る人は沖縄の三味線をよく知っているから。

６．考察

　沖縄の人は三線を､故郷を思い出させてくれるものとして認識しているようである。
　インタビューから、沖縄では三線に対するイメージが変わってきたと考えられる。三線を弾き始めるきっかけが様々あり、その中でもおばあ世代は最近始める人が多いようだ。これにより、おばあたちの間で三線に対する意識が変化し、それが最近であるのではと考えられる。
　沖縄は経済的に豊かになり、その上、安価な三線が売られるようになったため、高級品であった三線は手に入れやすいものとなり、より身近なものとなってきたようである。

また、かつて女性たちは弾いてはいけないという認識が人々の間にはあったが、現在では女性たちも男性たちと同様に弾くことが出来る。以前は、三線を弾く人はアシバーと呼ばれ悪いイメージがあったが、それも最近では無くなり、学校教育にも取り入れられるようになってきた。

この三線に対するイメージの変化は「島唄」などの三線が演奏される音楽の本土でのヒットや沖縄ブームが関係していると考えられる。今回の調査で協力してくださった三線店の方や三線教室の方はみな三線を本土の人に紹介する時は主に本土の多くが知っている「島唄」を用いる。この歌は本土出身のアーティストが沖縄をイメージして作り、本土でヒットした後、次第に沖縄の音楽として定着しいていった曲である。

メディアで三線はよく沖縄の伝統楽器として紹介され、本土では三線が広く知られるようになり、沖縄を感じることの出来るものとして認識されていった。

これらの外からの影響により沖縄では三線を見直すこととなり、沖縄において三線に対するイメージが変化したのではないか。

お年寄りにインタビューした際、三線ではなく三味線と言っていたことが印象的であった。これは三線を本土の人にわかりやすく紹介するためではないかとも考えられるが、沖縄では三線を三味線と呼んでいた時期があったのではないかとも考えられる。

参考文献

安里盛一（1990）『沖縄の歌三線―その風土とこころー』一茎書房
漆畑文彦（2000）『はじめての三線―沖縄・宮古・八重山の民謡を弾く』晩声社
王耀華（1993）「沖縄三線とその音楽の歴史を探る」『沖縄文化研究』20
「沖縄を知る事典」編集委員会編（2000）『沖縄を知る事典』日外アソシエーツ
宜保栄次郎（1999）『三線のはなし』ひるぎ社
勝連繁雄（1999）『わかりやすい歌三線の世界』ゆい出版
藤田正（2000）『沖縄は歌の島―ウチナー音楽の 500 年―』晶文社
山内盛彬（1959）『琉球の音楽芸能史』有隣堂

参考ウェブサイト

「沖縄古典芸能と異文化交流」http://www.geocities.jp/s_miya34/ronbun.htm
「沖縄三線.com」http://www.okinawa-sanshin.com/index.html